
?TOILES

雑原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

? TOILES

【Nコード】

N2410BA

【作者名】

薙原

【あらすじ】

万物を司る女神が崇拜されている世界『エトワール』

剣あり魔法ありモンスターありの世界で記憶を失ってしまった少年ユーリの記憶をとりもどすための物語が今始まる。

1 (前書き)

初めまして、薙原と申します。

暇を持て余していた時に偶然思いついた話なので今後どのように進んでいくかは分かりませんがよろしくお願いします。

「うっ……。ここは……？」

思わずそんな声が出る。身体全体から凄まじいほどの痛みを感じ、意識が飛びそうになるのを必死に堪えて辺りを見渡す。

周りにあるのはでかくていかにも豪邸という感じの見たこともない建物ばかり。

そして全身には傷一つないのにギリギリと痛み続ける体が悲鳴を上げる。

「こんな明るくてきれいな所初めて来た……。 」

不意に口からそんな言葉がこぼれる。自分が過去、どのような境遇にいたのか全く覚えていないが

決してこのような光にあふれた空間には居なかったことは直感で分かった。

「まあ、今はそれよりも……。 何処か休めるところに行かないと……。 」

こうしている間にも鈍い痛みが全身を侵す。このままでは間違いなく意識が飛び、そのまま息を引き取ることにならないこともないだろう。

「此処で気絶することだけは避けないと不味い……。 せめてあと少し……。 」

ここで意識は途絶えた。こちらに走ってくる人影を最後に見ながら……。

わたし、セシリア・シエトラントはおじいさまとお出かけをした帰りにおじいさまの家の前で倒れこんでいる男の子を見つけた。

「おじいさま大変っ。お家の前に怪我をした男の子がたおれてい
るわー!」

「何っ? ……幸い息はあるようだ。セシリア、すぐに家の者を
呼んで家に運ぼう。」

「はいっ!」

おじいさまにそう言われたわたしは一目散に家に駆けこんだ。

気が付いたら何もない真っ暗な世界にいた。

前を見ても暗闇。後ろを見ても暗闇。下を見ても暗闇。ただどこか温かい感じのする。

そんな世界に漂っていた。

「気が付きましたか？」

ふとそんな声が聞こえてくる。

……………ここは……………？

「ここは幻想ユメと現世ウツシヨの間。

簡単に言えばあなたの心の中です。」

……………あなたは……………？

「この世界のヒトの心に住まうもの。」

……………僕は何故ここに……………？

「私が呼ばせて頂きました。
大切なことを伝える為に。」

……………大切なこと……………？

「はい。」

……………何だ……………？

「あなたのことです。」

……………僕の……………？

「そうです。あなたはどこまで『自分』のことを覚えていますか？」

……………名前くらいしか分からない。自分が何処にいたのか。誰なのかさえも……………。

「でしょうね……………。それは私がああなたの体を無理にあそこに運んだ所為でしょう。本来あなたは違うところにいた。此処よりも暗く狭く寒く、何より寂しいところに。」

……………何故僕を助けた……………？

「あなたが苦しんでいる姿が私には耐えられなかった。それだけです。」

……………それならば何で今まで助けられなかった……………

「本当は私だってもっと早く助け出してあげたかった。しかし今の私の力ではできなかった。だからあなたを縛る力が弱まる時を待ち続けたのです。そして安全な所に飛ばそうと思ったのですが最後の最後に邪魔が入り、逃がすことはできたけれども不完全な転移により身体の中は傷ついてしまい記憶を失うということが起こってし

まったのです。幸いなことにあなたの体は拾われてきちんと手当を受けているようです。」

「弱ってしまった私ではもうあなたと話す事さえままならない。ごめんなさい。もうすぐあなたとの精神の協和も切れてしまう……」

「……待ってくれ。もう少し話を……」

「今はこれくらいしか話せません。これ以上が知りたいのならば失われた記憶を取り戻すのです。私達の可愛いユーリ……」。

その声とともに僕は突然あふれ出た凄まじい光に包まれた……

「待ってくれ！」

「ひゃあ！」

僕が飛び起きると隣からそんなかわいらしい声が聞こえてきた。あの不思議な夢の声を信じるのならばその声の主が道に倒れていた僕のことをわざわざ拾って手当までしてくれた家の人らしい。

「あの、えっと、もうからだはだいじょうぶ？」

隣を見ると6、7歳位の蒼銀の髪色をした女の子がおどおどしながらそう訊ねてきた。

「あ、うん。大丈夫だよ。」

つついっそんな情けない答え方をしてしまう。

「よかったあ。いまおじいさまをよんでくるからそのまままって。」

そうと言っや早く部屋を出て行ってしまった。

「それにしてもこの部屋でかいよな……。」

女の子が部屋を出て行ってしまいやる事がなくなってしまった僕は今いる部屋を見渡す。

広さもさることながら床にはきれいな絨毯が敷いてあり、天井にも大きなシャンデリア。調度品の類いもどことなく気品を感じさせる

ものばかりで今寝ているベッドにも細かな彫刻がある。
まちがっても此処は一般家庭の家では無いだろう。

「これからどうなるんだろう。」

それが今一番の悩みだ。あの不思議な夢も気にならないこともないのだが、今は今後の身の振り方が一番大切だ。なくした記憶を取り戻すにもまずはもう少し大きくなってからだ。あの女の子は自分の祖父を呼びに行ったようだがはたしてあの子の祖父はこんな名前しか持たず、道端に倒れていた自分の事を信用してくれるだろうか？

そんなことを考えているとドアをノックされた。

「どうぞ。」

ガチャツという音が聞こえた後、先ほどの女の子とともに70前後の女の子の祖父らしき男性が入ってきた。

「調子はどうだね？」

優しい声で尋ねられる。

「おかげさまですっかり良くなりました。助けただきありがとうございます。えっと……。」

「ああ、自己紹介がまだだったね。私の名前はミュラー・シエトラントという。」

こちらに居るのは私の孫娘の……。」

「セシリア・シエトラント、6歳です。」

「それで君は？」

「私はユーリ。姓はありません。」

「姓がない？」

「はい。」

「一緒に来た御両親は？」

「両親はいません。気が付いたら此処にいました……………」

「それは悪いことを聞いてしまった……………。すまない。」

「いえ、気にしないでください。ところで此処は？」

「私の家だ心配しなくていい。しかし……………ふむ。ユーリ君、君は行くあてはあるのかね？」

「あり、ませんが……………」

「それならばしばらくの間家にいないかい？」

「それは大変ありがたいお話ですが、流石にそこまでして頂くのは……………」

「遠慮しなくてもいい。これでも一応貴族でね、ユーリ君一人を養うことくらいはできるさ。」

それにここで帰してまたどこかで怪我をされたりしたら目覚めも悪い。何、老人の酔狂だと思ってくれればいい。それでも遠慮するのならば…そうだな、孫の遊び相手になるといのはどうかかな？」

「遊び相手、ですか？」

「ああ、みたところユーリ君はセシリアと同じくらいそうだからね。ユーリ君がセシリアの遊び相手になるのに対して私は衣住食を提供する。これならば納得してくれるかな？ そうそう、姓も私たちと同じ物を使うといい。」

「姓まで……………」

「ユーリ君、人の好意は素直に受け取っておくものだよ。」

「はい……………。これからよろしく願います。」

「おじいさま、もういいですか？」

「おお！ すっかり待たせてしまったな！」

「わたしがさいしょにユーリくんをみつけたのにおじいさまったらさつきからずっとひとりじめして……………。これからよろしくね、ユーリ君。」

「はい。よろしく願いしますセシリアさん。」

「セシリア。きょうからおともだちなんだからセシリアってよんで……。」

「分ったよ。これからよろしくね、セシリア。」

「うん！ こちらこそよろしくね！ ユーリ君！」

「ハツハツハ、さっそく仲良くなったようだね。ユーリ君、私からもセシリアをよろしく頼むよ。」

こうして僕、ユーリ・シエトラントの波乱にとんだ物語は幕を開けることになった……。

登場人物設定？

？ユーリ・シエトラント（推定6〜7歳）

この作品の主人公。以前はどこか別のけっして居心地のよくな
いところにいたらしい。

以前いたところからの脱出の際邪魔が入り、記憶を失ってしまう。
記憶を失ってしまったため今のところ血縁関係は不明。

この世界では珍しい黒髪黒眼で容姿は上々。屋敷の目の前で倒れ
ている所をセシリアに助けられ、

シエトラント家に保護？される。

？セシリア・シエトラント（6歳）

シエトラント家の一人娘。幼いころに両親を亡くしており、そ
れ以来祖父であるミュラーと共に暮らしている。貴族の娘という
ことから外に出て遊ぶということが出来なかった為ユーリという遊
び相手ができたことにとっても喜んだ。

蒼みがかった銀髪をしており端正な顔立ちをしている。

？ミュラー・シエトラント

現シエトラント家当主。幼少の頃両親を亡くしたセシリアを大
変愛しており、同年代の身近な友人がいないセシリアのことをい
つも気にかけていた。

とても温厚な性格で、倒れていたユーリが帰るところがないと知
るやすぐに孫の遊び相手として保護し、あまつさえ苗字まで譲
るという破格の待遇を設けてむかいいれた。

本人は一応貴族だといったが実はシエトラント家は王国建立にも
関与した大貴族である。

登場人物設定？（後書き）

感想、指摘がありましたらよろしくお願ひします。

シエトランド家に迎えられてから早5年。

俺ユーリ・シエトランドは12歳になり、いよいよ明日から王都から少し離れたところにあるカルディアナ冒険者育成校に通うことになる。冒険者というのは危険な魔物達モンスターの討伐から町へ移動する商人たちの護衛などありとあらゆる仕事をこなす、『冒険者ギルド』通称ギルドに所属する者たちを指す。一応15歳以上なら誰でも冒険者になることはできるがモンスターとの戦いは命がけの為、ミユラーさんに将来冒険者になると言ったら育成校を卒業しろと言われて今に至る訳だ。

まあ、それはいい5年前拾ってもらった命はむだに散らすことはことはしたくない。
ただと……。

「なあセシリー、本当に一緒についてくるつもりなのか？」

「ええ、ユーリを一人にしておくのは心配だから。」

この5年間で色々なことが変わった。例えばお互いの呼び方。出会った当時は「セシリア」「ユーリ君」だったのにいまでは「セシリー」「ユーリ」だ。しかし一番の変化と言えば俺が冒険者になると言ったらある日突然「私も冒険者になる！」と叫びだしたセシリーだろう。

あの時はメイドさんから料理人まで屋敷全体が慌ただしくなった。それもそのはず建国当時からの大貴族、シエトランド家の一人娘が将来家を捨てて冒険者になると言い出したのだ。

身元不明の俺を半養子扱いにしたことに加え本来そんなことが許されるはずが絶対にないのだが、ミユラーさんはセシリーと一度しっかりとお話してからそれでも意志が変わらないところ見て諦めたよう

だった。

わざわざ王宮に行き無理を押し通して今代での家の実質的なとりつぶしの許可をとり、セシリーの両親が決めたという許婚の家にも頭を下げてもらった(シエトラント家とセシリーが手に入るといふことで相当渋られたらしい)ミュラーさんには頭が上がらない。

「俺に付いてくるよりも今のまま貴族やってるほうが絶対に楽だとおもうけどなあ。」

「ユーリは私についてこられたくないの……?」

「そんなわけないだろ。セシリーと一緒に居れるのはすごくうれしいよ。」

「ねえユーリ、出会う前の事、まだ思い出していないの?」

不意にセシリーがそんなことを聞いてくる。

「ああ、まだ何も……。」

「寂しくないの?」

「全然。5年前セシリーとミュラーさんに拾ってもらってから今までずっとこの屋敷の人たちに良くしてもらったし、何よりいつもそばにいてくれただろ。それにどれだけ感謝したことか……。」

あらためて今までありがとう、セシリア。」

「あつ、えつと、うー。」

そうだ! さつきおじい様が呼んでいたから早くいかないと! 先に行っているわね!」

そう言っただけで慌ただしく逃げていくセシリー。初めて会った時思ったがこの5年間で本当に可愛くなったと思う。彼女の許嫁が婚約破棄を渋った理由も分かる気がする。

「そういえば俺もミュラーさんに呼ばれていたな。早くいかなく

「ちや。」

「ミユラーさんの部屋につくとすでにミユラーさんとセシリーが待っていた。」

「ユーリ君、セシリア。明日からいよいよ二人ともカルディアナの学生だ。そして冒険者になるということは常に死となり合わせの生活、生半可な覚悟では駄目だろう。もう一度聞こう、二人とも本当に覚悟はできているな？」

「はいっ」

「そうか……。ならばもう何も言うことはない。今夜は最後にゆっくり話しながら明日に備えて体を休めなさい。」

「これが今生の別れっていうわけでもないのに……。大丈夫、長期休暇にはなるべく帰ってきますから。」

「『なるべく』じゃなくて首に縄をつけてでも絶対に帰ってくるからおじい様は心配しないで。」

「すいませんでした。絶対に帰ってきます。」

「ハッハッハ。この年寄りのことはいいからしっかりと学んできてまた元気な顔を見せてくれ。」

「セシリーだけは絶対に守りますよ。」

「私だけじゃなくてユーリも元気に帰ってくるの。分かりました。」

「それではもう明日に備えて寝るといい。」

「お休みセシリア、ユーリ君。」

「おやすみなさいおじい様。」

「おやすみなさいミユラーさん。」

「ふう、最後までお前の事心配してたなミュラーさん。」
「そうかしら？ ユーリのことと同じくらい心配してたわよ。」
「そうか？」
「ええ。」
「いよいよ明日だな。ずっと不思議だったんだ、自分が誰なのかが……。それが冒険者になって世界を旅すれば分かる気がする……。これはそのための一歩なんだ……。セシリー、学校を卒業して冒険者になってもずっと一緒に居てくれないか？」
「いきなりなにを言うかと思えば……。いつになく弱気な発言ね。」
「そうかな？」
「うん。いつもだったらめったに人に聞いたりしないでしょう？」
「うーん、そうだな……。」
「でも、今までもずっと一緒に居たんだからこれからも一緒に決まっているでしょ。」
「……。ありがとう。」
「さて、もう夜も遅くなってきたから明日に備えて寝ましようか。」
「ああ、おやすみセシリー。」
「お休みユーリ君。」

入学式前夜、新しい生活へ期待を募らせながら俺たち二人は眠りについた……。

4 (後書き)

ご感想、ご指摘等ありましたらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2410ba/>

?TOILES

2012年1月8日23時53分発行